

平成 22 年 5 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2009

課題番号：18520119

研究課題名（和文） 大東亜戦争期における本居宣長受容の総合的研究

研究課題名（英文） The overall research about the receipt of MOTOORI NORINAGA in the period of the Pacific War

研究代表者

田中 康二（TANAKA KOJI）

神戸大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：90269647

研究成果の概要（和文）：

本研究は4年間の研究成果として、平成21年8月15日にペリカン社より『本居宣長の「大東亜戦争」』を出版した。当該書は「大和魂」「武士道」「日本精神」など、国学が軍国主義のイデオロギーとして、同時代の思想や新聞・雑誌などのジャーナリズム、また教育現場に大きな影響を与え続けた状況を多くの同時代資料を用いて実証した。また、宣長が時局に利用され曲解されるシステム、歪められるメカニズムを検証し解明した。

研究成果の概要（英文）：

I published 'The Pacific War on the history of the research of Motoori Norinaga' from Perikansha August 15, 2009, as study results of the present study of four years on. In this book I verified the situation in which *Kokugaku*, Japanese classical literature had kept having a big influence on journalism and Educational sites, as an ideology of the militarism. I clarified the system to which *Kokugaku*, Japanese classical literature was used for the Situation, and distorted. And I clarified the mechanism from which *Kokugaku*, Japanese classical literature was misinterpreted.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,300,000	0	1,300,000
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	3,500,000	660,000	4,160,000

研究分野：日本文学

科研費の分科・細目：日本文学

キーワード：本居宣長・大東亜戦争・日本精神・松坂の一夜・敷島歌・没収指定図書・公職追放

1. 研究開始当初の背景

国学および本居宣長受容史の中で、1940年

代は真空地帯であった。戦時中に国学が戦意昂揚のために利用され、戦後には戦争に荷担

した咎でしばらく抹殺された。多くの国学関係書が没収指定図書となり、少なくない国学研究者が公職追放となった。それ以降、この時期の国学を語るのはタブーとされた。

当該研究を開始した時にはすでに戦後 60 年を経過しており、戦時中の日本思想の再考を企てる研究者も出始めていた。そのような動きと距離を置きつつ、研究史の盲点となっている戦争期の国学という問題に切り込んだ。

2. 研究の目的

本研究は国学者本居宣長が近代においていかに受容されてきたか、ということを経験した。以下に明らかにすることを目標とした。(1) 研究者・専門家の著書・論文。(2) 新聞・雑誌などのジャーナリズム。(3) 教科書などの教育関係書。(4) 「史蹟名勝天然記念物保存法」(1919 年施行) による国家による日本文化保護の実態。

本研究は国学受容史の研究として採択されたので、近代思想史や教育史、神道学等の知見を参照しながらも、戦争期において国学者本居宣長をいかに位置づけるかということに照準を絞った。

3. 研究の方法

上記のような「研究の目的」を遂行するために、各項目において以下のような方法を用いた。(1) 研究者・専門家の著書・論文については、岡田千昭『本居宣長の研究』所収「本居宣長研究文献一覧」掲載の著書・論文を収集するところからはじめ、さらに各種の目録やデータベースを駆使した。(2) 新聞・雑誌などのジャーナリズムについては、前項岡田稿を基礎として、なおかつ代表的な雑誌のバックナンバーを調査した。新聞記事に関しては朝日新聞と読売新聞については記事

CD-ROM を使って検索した。また、『新聞集成昭和編年史』が便利であった。(3) 教科書などの教育関係書については、国立国会図書館蔵の教科書および指導書(多くはマイクロフィッシュ)を虱潰しに調査した。(4) 「史蹟名勝天然記念物保存法」(1919 年施行) による国家による日本文化保護の実態については、各自治体で編纂された『史蹟名勝天然記念物調査報告』を悉皆調査することを目指したが、最終的には三重県や愛知県、東京都など、宣長が関係した自治体の調査報告に絞ってデータを収集した。

以上の手順を経て収集した文献およびデータに基づいて、これを時系列に配置することにより、国学(宣長)受容の実態を顕在化することができた。

4. 研究成果

主な研究成果は『本居宣長の東大東亜戦争』に収録した。ここではその章立て・目次を記し、その内容を要約して研究成果としたい。

第一章「同時代思想としての国学(上) 一幕末を経由して大東亜戦争期に至る」は、国学が大東亜戦争期に日本の同時代思想となった経緯を論じた。国学はそれが成立してから、幕末と大東亜戦争期の二度、大きく変容したが、その変容の仕方は従来の思想との壁が溶融し、その差異よりも同質性の方がクローズアップした。その際、思想体系として水戸学・陽明学・武士道などと同一視され、個別には尊王論・攘夷論・知行合一説などが国学固有の思想と見なされるに至った。それは後世の誤読とも言えるが、誤読は後世の受容様式でもある。そういった意味で、大東亜戦争期における国学は一部の学者による専有物ではなく、他の思想とともに普遍的価値をもたらす思想に変容したのである。第二章「同時代思想としての国学(下) 日本精神

論の流行と変容」は、満州事変を契機に流行した「日本精神」に関する言説が、一九三〇年代後半に大きく変容し、大東亜戦争期に突入するまでを素描した。そこには国民精神文化研究所の教育、文部省による「日本精神論」の調査、「日本精神叢書」の出版などが絡んでおり、本格的に世界大戦に突入する時に日本精神は国策イデオロギーになった。当然のことながら、日本精神は国学における大和魂・大和心と同一視され、宣長を論じる際には必ず登場するキーワードとなった。この二章を大東亜戦争期の宣長受容の総論として、以下の各論との間に有機的な結びつきを持たせた。

第三章「近代宣長像の形成と変容（上）—「松坂の一夜」伝説の成立」は、近代における宣長像が形成されるに際して、「松坂の一夜」伝説が大きく関わったことを論じた。最初は佐佐木信綱が名文「松坂の一夜」をしたためたが、それはライトされ小学六年の国語教科書に採録されて、師弟を結ぶ一期一会の国民的物語となった。それが大東亜戦争期に紙芝居になり、一期一会よりも宣長の学的業績が強調されることになる。第四章「近代宣長像の形成と変容（下）—敷島歌の解釈の変容」は、「松坂の一夜」とともに宣長像を決定づけた歌「敷島の大和心を人間はば朝日に匂ふ山桜花」の受容史を論じた。この歌は武士道精神を象徴する歌として受容され、散る桜を詠んだ歌として誤読されるに際して、宣長像にくっきりとした輪郭が与えられた。大東亜戦争期には『愛国百人一首』に入集され、特別攻撃隊と重ねて見られるに至った。この二章は近代の宣長像が国民一人一人に周知される経緯を解明したものである。

第五章「宣長研究と時局（上）—序文に見る時局発言をめぐって」は、大東亜戦争期に出版された数多くの宣長研究書の序文を対

象として、それが時局に言及する様式を解明した。宣長研究書の多くは時局におもねる体裁を取りながらも、それはおおむね時局への挨拶であり、実際には学術上の価値を時局協力にすり替える策略であった。全く時局に言及しない研究書の存在も意味があると言えよう。第六章「宣長研究と時局（下）—煽情的宣長論をめぐって」は、前章とは逆に宣長の言説を曲解し、大東亜戦争の大義に利用しようとした著作を論じる。宣長の「漢意」排斥説を拡大解釈して攘夷論に読み替え、古道論を敷衍して国体論に結びつけた。戦後になって宣長国学がタブー視されるようになった温床がここにあると言えよう。この二章は、大東亜戦争期に出版された宣長研究書を形態と内容の両面から検討し、戦後に国学への誤解が蔓延する土壌を析出した。

第七章「学統観の変遷（上）—平田篤胤への継承性」は、没後の門人と言われる篤胤の国学が明治維新の原動力となったように、大東亜戦争期にも国家神道の中核として機能したことを論じた。篤胤は四大人の一人として尊崇されたが、大東亜戦争中に没後百年祭を迎えてますますもてはやされることとなった。第八章「学統観の変遷（下）—徂徠学との関連」は、「松坂の一夜」伝説とは異なり、宣長が漢学者荻生徂徠に影響を受けたとする説が、大東亜戦争期においてどのような扱いを受けたのかを論じた。当時、中国は戦争の相手国であったがゆえに、徂徠からの影響説は一面ではタブーであったごとくである。この二章は、戦前の国学で常識であった四大人観が必ずしも盤石なものではなく、危うい学統意識の上に立てられたものであることを明らかにした。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

[雑誌論文] (計 8 件)

- ① 田中康二 「江戸派の血脈」、『神戸大学文学部紀要』、査読なし、36 号、2009 年、pp1-19
- ② 田中康二 「文政期江戸歌壇と『草縁集』」、『神戸大学文学部紀要』、査読なし、35 号、2008 年、pp1-24
- ③ 田中康二 「江戸派の出版」、『神戸大学文学部紀要』、査読なし、34 号、2007 年、pp45-77
- ④ 田中康二 「小山田与清の出版」、『文化学年報』、査読なし、26 号、2007 年、pp51-79
- ⑤ 田中康二 「文学は「誤読」で行こう」、『江戸文学』、査読なし、36 号、2007 年、pp1-6
- ⑥ 田中康二 「葛西因是『通俗唐詩解』の解釈戦略」、『江戸文学』、査読なし、36 号、2007 年、pp61-72
- ⑦ 田中康二 「雪岡禪師と江戸派」、『鈴屋学会報』、査読有り、24 号、2007 年、pp73-88
- ⑧ 田中康二 「(特集)江戸文学のスピリッツー漢意」、『江戸文学』、査読なし、34 号、2006 年、pp46-50

[学会発表] (計 0 件)

[図書] (計 2 件)

- ① 田中康二、ペリかん社、『本居宣長の大東亜戦争』、2009 年、p271
- ② 緒形康編、双文社出版、『一九三〇年代と接触空間ーディアスポラの思想と文学』、2008 年、pp62-91、第一部第三章「日本精神論の流行と変容」(田中康二)

[その他]

ホームページ等
なし。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 康二 (TANAKA KOJI)

神戸大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：90269647